



鍼と内臓機能調整 -膀胱機能と鍼治療-

鍼灸学部・臨床鍼灸学講座

北小路博司

明治東洋医学院専門学校 鍼灸学科

本城 久司

鍼治療のターゲットは運動器疾患のみ？

鍼治療を想起するきっかけとして、腰痛や肩こり、膝痛などの運動器疾患に対する治療法の1つであると広く知られています。では、鍼治療の対象は運動器疾患だけなのでしょうか？

私たちが調査した結果では、鍼灸院などに来院する患者が訴える主な症状の約82%は運動器疾患であり、泌尿器科疾患を主に訴えて来院する患者は08%に過ぎませんでした。しかしながら、同じ調査対象において、夜間何度もトイレに起きる「夜間頻尿」を有しているのは約26%もあり、泌尿器科的症状があっても訴えていないということが判明しました。これは、泌尿器科疾患に鍼治療が効果を示すことを十分理解されていないこともその理由であると考えられます。私たちは、泌尿器科疾患に対する鍼治療の効果について明らかにしています。

頻尿・尿失禁に対する鍼治療

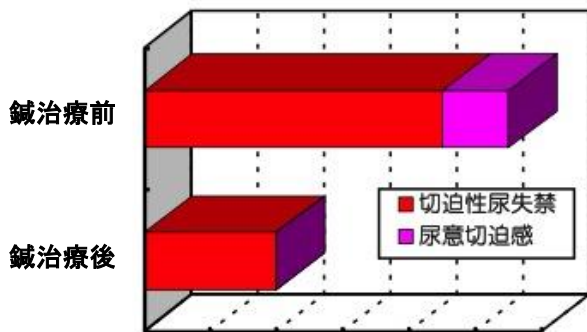


図1. 頻尿・尿失禁に対する鍼治療の効果

頻尿・尿失禁を訴える患者さんを対象に、週1回の治療間隔で鍼治療を行い、4回終了後の治療効果を検討したところ、図1に示すように症状が改善していました。具体的には、鍼治療後に尿失禁が消失し、尿意切迫感（突然、我慢できない尿意が起こり、もれそうになる感覚）を訴える症例が半減し、全体として64%の症例に効果が認められました。では、こうした効果は症状の軽減といった自覚的な変化だけなのでしょうか？

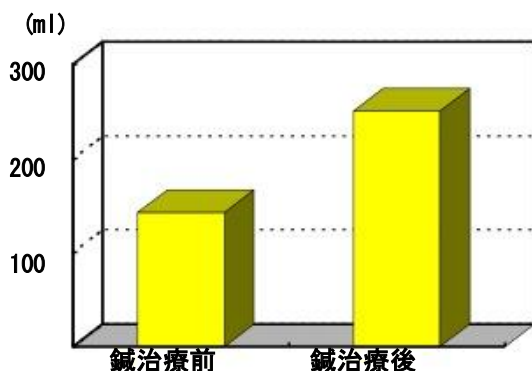
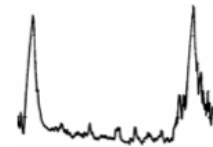


図2. 鍼治療前後の膀胱容量の変化

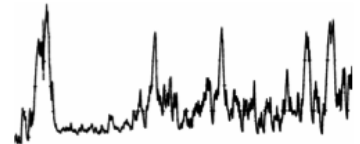
膀胱機能の客観的なデータの1つである膀胱容量について鍼治療前後で比較してみると、鍼治療前に比べ鍼治療後は統計学的に有意な膀胱容量の増加を示しました(図2)。このことは、鍼治療によって膀胱機能が調整された結果、頻尿・尿失禁といった自覚的症状が改善したのだと考えられます。

鍼治療は薬と異なる作用を示す

脳梗塞後



抗コリン剤投与



抗コリン剤+鍼刺激



図3. 脳梗塞ラットの膀胱機能に及ぼす効果

小動物を用いて実験的に脳梗塞を作成し、脳梗塞によって引き起こされる膀胱機能異常(頻尿改善薬を投与しても起こる不随な膀胱の収縮)に対して鍼刺激は調整作用があることを明らかにしました。また、その作用は頻尿改善剤と異なる作用であることも明らかになりました。

こうした結果の積み重ねにより、鍼治療の効果は自覚的な症状の改善にとどまらず、内臓機能を調整する作用を有していると理解されています。